

令和4年度 被曝77周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典 参加中学生 生徒文集

妙高市教育委員会

1. 目的 8月6日・9日に広島・長崎で平和祈念式典や祈念集会が行われることの意義を理解し、式典への参加や報告会、実践活動を通して、平和を願う心情・態度と命を大切にする心を育てる。

2. 期間 令和4年8月8日(月)～8月10日(水)

3. 日程

8 月 8 日 (月)	上越妙高駅…はくたか号（長野駅乗換）かがやき号…東京駅…のぞみ25号…博多駅 8:28 10:20 10:30 15:30 …特急かもめ…長崎駅=…タクシー…ホテル着 15:55 17:55 18:15
8 月 9 日 (火)	ホテル…タクシー…長崎原爆資料館見学…徒歩…平和公園【平和祈念式典参加】 8:00 <u>（千羽鶴持参）</u> 8:30～9:10 9:25 10:40～11:45 …徒歩…昼食…タクシー…長崎港…（軍艦島クルーズツアー）…長崎港… 12:00 13:20 13:40 16:10 徒歩…ホテル周辺散策…徒歩…ホテル到着…夕食…被曝体験講話 17:40 8:00 19:00 20:00
8 月 10 日 (水)	ホテル…徒歩…グラバー園…徒歩…ホテル…タクシー…長崎駅…リムジンバス 8:15 8:30 9:20 9:30 10:00 10:15 …長崎空港（昼食）…JAL610…羽田空港…モノレール…浜松町…山手線 10:59 12:25 14:15 14:50 …東京駅…はくたか571号…上越妙高駅（解散） 16:32 18:33

長崎で学んだこと 妙高市立新井中学校 3年 男子生徒

この度の長崎での研修は、今の自分がどれだけ豊かな生活を送り、平和であり、そしてそれがどれだけ尊いことか、友達と一緒にいれることが幸せだということのを再認識させてくれました。

私は、原爆資料館に行ってきました。そこでは、原子爆弾の構造や落とされた時の街の状態、原爆の熱で溶かされたお酒の瓶、瓦などが展示されていました。今では想像もできないような状態だったことが分かりました。また、被曝者の被曝体験も聞いてきました。原爆が落ちた直後は、ものすごい振動、立ってられないほどの爆風と光と熱で多くの人が亡くなったそうです。爆風の状況としては、畳が剥がれ、その畳に、爆風で割れたガラスが刺さるほどだったそうです。当時の方は原爆が落ちたことを「もう一つの太陽が落ちた」と言っていたそうです。被曝者の方が講話をしてくださる際の口調や表情などから、戦争は二度と起こしていけないと強く思いました。

軍艦島では、波が高かった為、予定していた軍艦島上陸は叶いませんでしたが、外観を見ることはできました。人が住む為の集合住宅が多くありましたが、人の気配はなく、正直、不気味な雰囲気だと感じました。軍艦島上陸が叶わなかったかわりに、高島に行きました。高島では、お土産を買ったり、猫を見たりしました。また、出島にも行ってきました。出島の近くには、妙高市では通っていない路面電車が走っていたり満員電車が通っていたりしました。

どの日程も、友達と話をしながら楽しく過ごせてとても楽しかったです。今回のような機会は滅多にないので、本当にありがたく感じました。そして、平和について改めて考える機会となりました。今回経験したり感じたりした思いを、折に触れ、周りに伝え、共に考えていきたいです。

長崎で学んだこと 妙高市立新井中学校 3年 男子生徒

1945年8月9日11時02分、今から77年前のその時長崎はとても強い音、光、そして爆風が押し寄せた。太陽が落ちたようだったと、原爆体験者の三瀬さんはそう語った。私はそれを聞いて、どれだけすごいことが起こったのだろうかと思った。爆心地から3.6キロメートルのところにあった家も、爆風でガラスが割れ、家の中のものも飛ばされそして、畳までもが飛ばされたと言う。原爆は、私が想像していたより、はるかにすごい威力なのだと感じた。

原爆が落ちた後も近くの国民学校の体育館には、怪我をした人や焼けただれた人が端から端まで横たわり、グラウンドは死体処理場になってしまっていたそう。その死体は、どんどん燃やされもうどれがどの人の骨か分からなくなるくらい沢山の人が燃やされた。そして、戦争が終わって少し落ちついた頃にその骨は、国民学校の生徒たちが1つ1つ片付けたそう。どんな思いで、生徒たちがその骨を拾ったか想像すると胸が張り裂けそう。

戦争が終わっても苦しい生活は続いた。それは、食料不足だ。作ものが少ないから、のいちごやどんぐりそして、はちの卵まで食べたそう。生きていくには、そうせざるをえなかったとおっしゃっていた。いまの私たちがこのような体験をしたら生きていけるのだろうかと思った。

この話を聞き改めて平和とはどういうことだろうと私は考えた。出た結論は、相手のことを思いやることなのではないかと思った。そうすれば、争いや戦いが起こらないと思ったからだ。

「平和は人類共通の世界遺産」と三瀬さんはそうおっしゃっていた。もう二度と悲惨な戦争を繰り返さないために、私たちみんなで体験者の話を語り継いで平和を作っていくべきだと思った。

77年前の今日 妙高市立新井中学校 3年 男子生徒

僕が今回の長崎研修で、原子爆弾の恐ろしさ、そして実際に被曝した人は何を思っているのかを「見て」「聞いて」「感じる」ことができたことがよかったです。

研修に行く前までは、なぜ戦争のことを伝えていかななくてはならないのだろうと思っていました。しかし、今回の研修で伝えることの大切さを知ることができました。それは世界で日本だけが被曝国なので 77 年前にあった悲しみ、苦しみ、辛さを伝え世界が本当の平和になり、核のない世界そして戦争のない世界を目指していくために必要だからとわかりました。77 年前になにがあったのか正しくそしてどうしてそんなことになってしまったのかを考えていかななくてはならないと思いました。原爆を体験した人は年々少なくなっているので今回の講話はとても貴重なものとなりました。

夜の被曝体験講話では三瀬さんからの話でした。普段では聞くことのできない話を聞くことができました。学校では普通の授業ではなく戦争に備えた授業がとても多かったそうです。原爆が落とされてから少してから今度は被曝した人たちへの差別が行われていたことを知って決して差別などをしてはいけないと思いました。三瀬さんの話は実際に体験した話なのでとても詳しく当時の状況が知ることができてよかったですし、今後絶対に聞くことのない話なんだと思いました。

僕は今回平和学習に参加できてとてもよかったです。なぜなら普段ではなかなか体験できないようなことが多くあって心に響くものがあったからです。今回経験したことは一生心に残る活動ばかりでした。戦争、原爆改めて恐ろしさが実感できて、核兵器、戦争のない暮らしがどれほどよいのかよくわかりました。そして今世界ではロシア、ウクライナなどのことが問題になっていて早急に解決してほしいと願います。

長崎で学んだこと 妙高市立新井中学校 3年 男子生徒

今回長崎に行ってきた中で様々なことを学ぶことができました。最初に行った原爆資料館では原爆の威力、歴史、非人道性などを肌で感じるすることができました。実際の映像や画像もあり、「原爆が落とされた」という事実を改めて感じました。また 1945 年当初から現在に至るまでの核の歴史も同時に学ぶことができ、とてもよい経験になりました。

そして実際に被曝されたという三瀬さんからお話をさせていただきました。三瀬さんは爆心地から 3 キロの地点で被曝したそうですが、窓ガラスは割れ、畳は吹き飛び家の中がすごいことになったと聞きました。たった一つの爆弾で三キロも離れた家にまで爆風が届き、家を破壊する…当時の様子を想像し、とても恐ろしい気持ちに襲われました。そしてさらに怖いのは今も日本は核の脅威に脅かされていることです。そして原爆が落とされた後も負傷者を助けられないこと、学校が火葬場となったこと、食べものが少なく毎日お腹を空かせていたこと、サツマイモが当時のご馳走だったと聞いたときには驚愕しました。また戦争が終わり 2 学期になっても友人が亡くなり、火葬場となっていたグラウンドの掃除。今では考えられないほどの過酷な世の中だったことが身にしみて感じました。長崎に行き、感じ得たものはとても大きかったです。

このような核をなくすには核についてもっと私たちは知る必要があると思います。そして何故核を保有しなければいけないのか。相手の主張も聞く必要があると思います。対話での解決で努力をし、有事の際にも平和を守るために物理的な準備と心の準備が必要だと思いました。僕たちも今回学んできたことをしっかり伝える必要があります。今日の世界でもウクライナをはじめ台湾有事など日本も戦争の惨禍に巻き込まれる恐れがあります。今だからこそ真の平和を勝ち取るためにはどうしたらよいか。自らの意見を発信し、みんなと一緒に考えていきます。

長崎で学んだこと 妙高市立新井中学校 3年 女子生徒

八月九日、私たちは長崎の平和記念式典に参列しました。刻一刻と迫る十一時二分。それを知らなかった当時長崎にいた人々。そのことを考えると胸が苦しくなりました。そして迎えた十一時二分、鐘の音と共に黙とうを捧げました。私はその後すぐの被曝者代表として平和への誓いを行った宮田隆さんの言葉に強く心を打たれました。

“Please visit Nagasaki. To see is to believe, No more Nagasaki Stop Ukraine”

その言葉に込められた、核廃絶への強い願い、みなぎる力をこれからの未来を担っていく私たちが受け継ぎ、核廃絶をより現実的なものにしていかなければと思いました。

また、午後には聞いた三瀬さんからの被曝体験を聞き、「勉強したいのにできなかった。」「二学期が始まったが、原爆によって爆死し、もう会うことがない同級生がいた」という私たちが「当たり前」としている日常は「当たり前」という皮をかぶった非日常だということを思い知らされ、私の平和を願う心をさらに強くしてくれました。

今回の研修を通して、一九四五年八月九日に起こった悲劇は繰り返されるべきではないと、何よりもこの三日間を共に過ごした仲間たちを戦争によって失いたくない、失われるべきではないと強く思いました。白黒写真に写る「ナガサキ」ではなく、色のついた現実の「ナガサキ」だった事を忘れずに、学校の人や家族、自分の大切な人に今回経験したことを伝え、共に平和について考え行動していきたいです。

ナガサキ3日間の学び 妙高市立妙高高原中学校 3年 男子生徒

現代日本が安全で恵まれていること、そして私たちが十分な生活を保証されているという事実を今回の長崎派遣事業を通じて再認識することとなりました。

2日目の式典参加や被曝体験講話を核とした平和学習において、私を感じたのは「この世界には平和というものが、いまだに実現されていない」ということです。

それは何故か。

講話の冒頭に、講師の三瀬清一郎さんは、こんなことをおっしゃいました。「今のウクライナは、77年前の長崎と同じだ」と。現在、東欧の戦地には、「帰りたい」「眠りたい」など、私たちにあって、ごく当たり前に見えることを願う子供たちが大勢いるといひます。

罪のない一般市民が、戦争の最大の被害者であるという事実は、歴史に共通しています。三瀬さんは、ウクライナの子供たちが直面している悲劇に、自身が少年時代を過ごした故郷・ナガサキの凄惨な過去の記憶を照らし合わせておられたのです。日本では今年、8月9日、終戦から77年の節目を迎えました。戦争がないという意味の「平和」が実現され、現在進行形で発生しているウクライナの戦いも、ネットの情報を「モニター」という媒体を通し目にするのみとなりました。

今のウクライナでも、77年前の日本でも、「領土奪還」や「陛下のために」といった大義名分のもとに、多くの人々が命を落としています。また、それらによって国際関係は分断され、その緊張がのちに実現する悲劇への入り口となっているのです。

自分や、自分のいちばん大切な人が犠牲とならないために、自分自身が守りたいものは何か。その答えは、人の数だけあります。平和な日常が当たり前の日本で真の「平和」を実現するために必要なのは、まず自分でそれを考えてみるのだと思うのです。

長崎で学んだこと

妙高市立妙高高原中学校 1年 女子生徒

私が長崎に初めて行って学んだことは沢山あります。

2日目は原爆資料館に行き、平和記念式典に参加し、三瀬様からのお話も聞きました。

原爆資料館では、当時のものが沢山飾られていて、最初に飾られていたのは、当時の時計でした。原子爆弾が投下されて爆発し町中にドーンという音が響き回りました。音がなると同時にその時計は、投下された11時02分で止まっていました。兵隊さん達の服はボロボロだったので、たくさん怪我などもしたと思います。展示ものを見て当時のことを考えることができました。

平和式典では一番最初の歌の『もう二度と』で、被曝者の皆様が『もう二度と被曝者を作らないで』と訴えて歌っている様子がありました。被曝者代表宮田隆様からの平和への誓いの言葉では、『全世界が一生平和でいてほしい』『もう2度と苦しい思いをしたくない』と私は聞いていて思いました。

三瀬様からの講話では、実際に体験した衝撃的な話を、たくさん話してもらいました。原子爆弾が投下されたときの光は『太陽が落ちてきた』と言って、ほかにはオルガンのふたを閉じた時に原子爆弾が落ちたのにもとてもびっくりしました。もし私が小学5年生の時目の前で落ちてきたら、家族に『今までありがとう』も言えずにお別れをしてしまうのでとても悲しくなってしまいます。

「当時の人たちは何も悪いことをしていないのに！無差別！」と思いました。勝ち負けで決めるのではなく、コミュニケーションをとることも大事だと思います。また、当時の人たちに『平和とはこういうことだよ！』と教えてとても辛い戦争を忘れて平和を実感してもらいたいと私は思いました。これまで戦争については深く考えていなかったけれど、長崎に行って『戦争の悲惨さ』『平和の尊さ』『命の大切さ』『人との関わり方』についてなどたくさん学べてよかったと思います。

本当の平和

妙高市立妙高中学校 3年 女子生徒

「当たり前なことができるのが本当の平和だ」

そうおっしゃられたのは、小学五年生の頃に被曝を経験した三瀬 清一郎さん。三瀬さんは小学五年生の時に原爆被曝地から3.6km離れた家で被害にあいました。

長崎県では毎日のようにアメリカの爆撃機が飛んでいる状態でした。いつ落とされるかわからないという恐怖と、落ちるかもしれない時にはサイレンが鳴るので四六時中安心ができません。『明日自分の命はあるのか？』という状況、皆さんは耐えられますか？この頃はいつ自分が死んでしまうかわからない、死と隣り合わせの状況だったのです。

昭和20年の8月9日11時2分、長崎県に原爆が投下されました。原爆が落ちた瞬間はまるで『太陽が落ちた』ように思えるほど眩しかったそうです。原爆被曝地から3.6km離れた三瀬さんの家でも、家中の窓ガラスが割れ、和室の畳がはげ、家具も倒れ悲惨な状況だったと仰られていました。話を聞いている時(とても生活できる状況ではないな)と思いました。実際家中生活できる環境ではなく、床に窓ガラスの破片が広がっていたり、家具が倒れていたりと安全な環境ではありませんでした。また、食糧難により食べるものも限られ、我慢をするか自給しなければならない日々が続きました。

さて、皆さんはこの話を聞いてどう思いましたか？私はこの話を聞いた直後は言葉が何も頭に思い浮かびませんでした。「長崎県に原爆が落ちた」ということは授業で習ってある程度は知っているつもりでした。

ですが、私が知っていたのは長崎県に原爆が落ちたということだけで、どれほどの威力だったか、原爆による他の被害すら知りませんでした。だから話を聞いた後は驚愕しました。

現在でも原爆の被害にあった人への偏見が消えていません。被曝者というレッテルは子供へ、ひ孫へとどんどん続いていきます。原爆には放射線が含まれており、その放射線を浴びた人は癌になる可能性があり、その被曝者の子供は病気になりやすいなどと差別をされることも多いのだそうです。

「当たり前ことができるのが本当の平和だ」と三瀬さんはおっしゃっていました。今 現在日本は平和だと感じる人も少なからずいると思います。ですが私はそうは思いません。実際に原爆の被害が起きたところは復興が始まり、今では人々が普通の暮らしをしています。ですが、被曝者、被曝地としてのレッテルは、はげないままです。これが「当たり前」でいいのでしょうか。国内で差別が起きている状況を本当に「平和」と言っているのでしょうか。

私達は自分で過去を知ることができません。授業やテレビを見ないと過去に何があったかわからないまま現在を生きることになっていきます。過去を知り、現在へ活かし、未来へ繋ぐ。これを繰り返すことで全員が生きやすい本当の「平和な国」を作りあげられるのではないのでしょうか。

そのためにも私達は学ばなければいけません。未来へ語り継ぐための知識を付け、それを共有することで差別や偏見をなくすことができます。「平和」は、私達全員で作りに上げていくものです。

私は今回、平和を願う心情・態度と命を大切にすることを育てるために長崎へ行きました。三日間を通して自分の平和に対する思いは変わりました。このような貴重な体験をしたことを誇りにもち、学んだことを他の人へ伝えていき、いつか皆さんの「平和」に対する思いが同じになるよう、自分も微力ながら語り継いでいきたいです。

長崎で学んだこと

妙高市立妙高中学校 3年 女子生徒

今回私は長崎で原爆が落ちたとき人々はどうのような影響を受けたかをテーマに学んできました。

まず私は原爆を教科書でしか見たことがなく日本にすごいのが落とされたのだというイメージでいました。長崎へ行く前に本などを見ていくうちに今現在も被曝された方がなくなってしまうことに衝撃を受けました。原爆資料館で爆心地から700m先のところで堤郷子さんという当時(14歳)の方のお弁当箱が変形しており、中に入っていたお米は火災で石化しているものがあり、爆心地から特に近い所は被害がすごかったのだろうと想像できました。背中一面に火傷を負っている写真などもあり、ものすごく痛かったのだろうと思いました。

三瀬様の講話では三瀬様は10才の時3.6キロ先で被曝されたと言っており10歳で私が体験していたら恐怖でしかなかったと思います。太陽が落ちたという表現をされており、ものすごい衝撃風が来たのだろうと想像が付きませんでした。被曝後は食糧難で木の実や木苺を山へ行って食べていたと言っていて、今では考えられないようなことが起きていたのだろうと思いました。被曝したのも苦しんだとおっしゃっていたのですが、その後も結婚するにもあの方は被曝2世など言われたり、子供が生まれたときに子供が正常じゃない可能性があったりして、被曝後も苦しんでいらっしゃることに衝撃を受けたりしました。

今ウクライナで戦争が起きていますが、わたしは世界で戦争がなくなって欲しいです。そのためお互い話を聞くことが大事だと思います。それが行われればいいと思いました。私もこれからこの話を語り継ぎ、長崎が最後の被曝地になるようにしたいと思います。